



沖縄のB小学校、奇跡の軌跡

データと対話で築く、学びの共同体

「家庭に期待できない」 が前提の場所

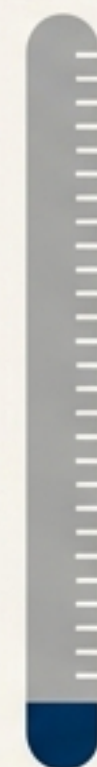
B小学校は、子どもの貧困率が全国で最も高い沖縄県にあります。
市内で最も要保護・準保護家庭の割合が高く、その数値は約47%に達していました。



社会的背景

約47%

要保護・準保護家庭



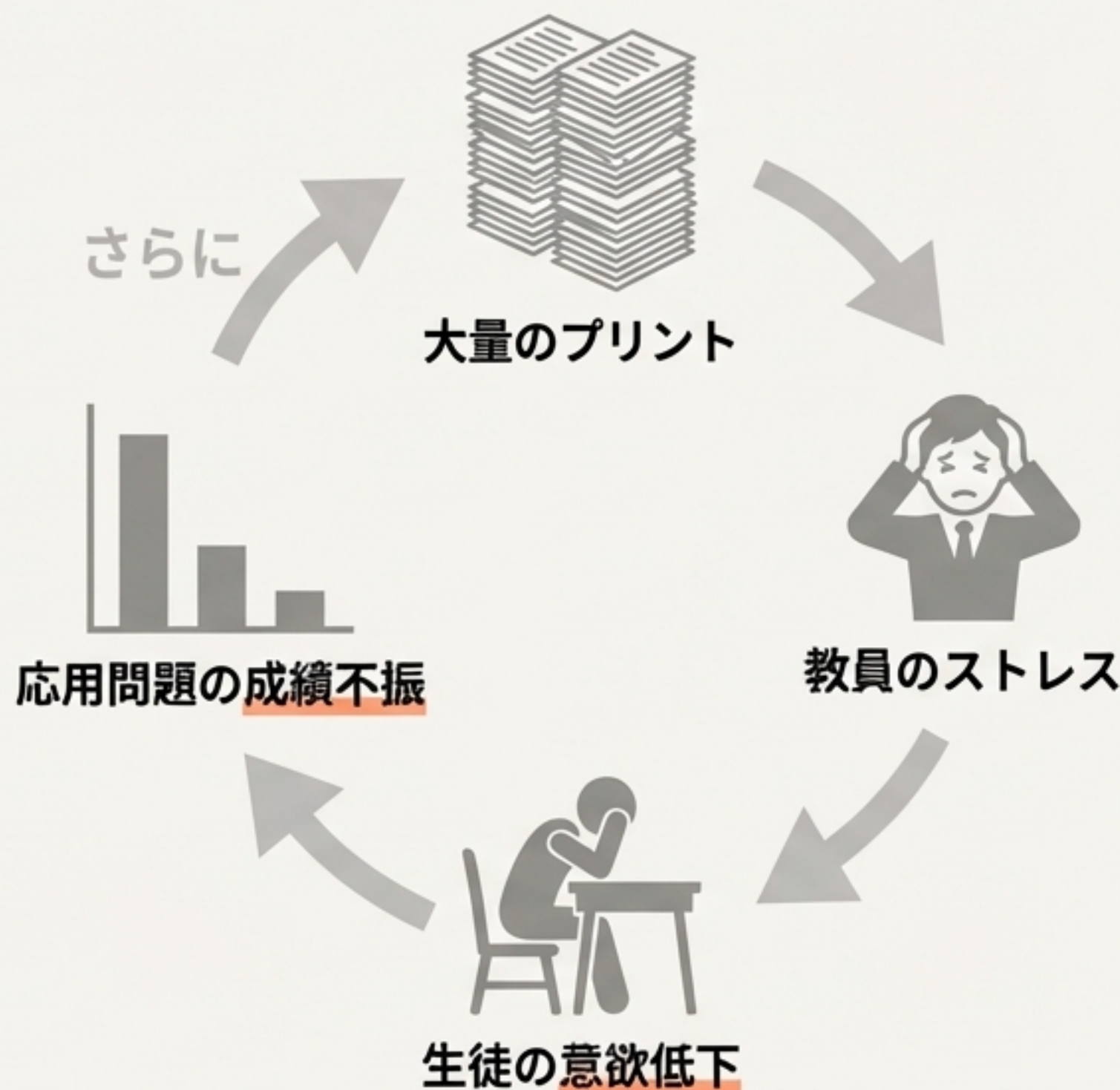
◀ 48位相当

学力的位置

平成26年度の全国学力調査の結果を47都道府県に当てはめると、国語A・算数B・総合で「48位相当」となり、全国最下位の沖縄県の平均にも及ばない状況でした。

「わかるまで帰さない」 終わらないプリント地獄

当時の学力向上の取り組みは、毎日大量のプリントをこなすことに終始していました。
「子どもたちがわかるまで帰さない」という方針でした。



パラドックス：この方法は、知識・理解を問う「算数A」では全国平均に近い点を取っていましたが、活用力を問う「算数B」の成績は壊滅的でした。

現場の疲弊：処理しきれないプリントが教室に山積みになり、教員からは「それを見るだけでも正直ストレスです」という声が上がっていました。生徒の学習意欲も低下していました。

教師の変容を促す3つのステップ

B小学校の変革は、根性論ではなく、授業改善を中心とした戦略に基づいています。
その中核をなすのが、教師の成長を支援する以下の3ステップです。

ステップ1: 理解

授業改善の基礎となる
「理論」を提供する。

ステップ2: 具体化

理論が実際の授業でどう見えるかを「映像」で示す。

ステップ3: 実践

授業参観とデータに基づく
対話で「実践」を支援する。

『教頭だより』 - 理論を毎週の「対話」に変える

宮城教頭（当時）は、毎週『教頭だより』を発行し、学力向上や学級経営に関する教育理論を継続的に発信しました。これは、単に「もっと頑張れ」と精神論を説くのではなく、「授業の質を高めることで成果を出す」という転換を促すための重要なツールとなりました。多忙な教員が、プレッシャーを感じずに新しい知識に触れる機会を創出しました。



QRコード：理論から実践への最短距離

『教頭だより』にはQRコードが印刷されており、スマートフォンで読み込むと、関連する授業の動画をすぐに見ることができました。

「理論を実践するとは、こういう授業です」という具体例を映像で示すことで、教員は具体的なイメージを持って授業改善に取り組めるようになりました。

学校のサーバーには、いつでも閲覧可能な100時間以上の授業動画アーカイブが整備されていました。



理論の理解と具体例の視聴に加え、年間50～100時間におよぶ授業参観とフィードバックを徹底しました。指導のポイントは、主観ではなく「データで語る」ことでした。

最初にわかった

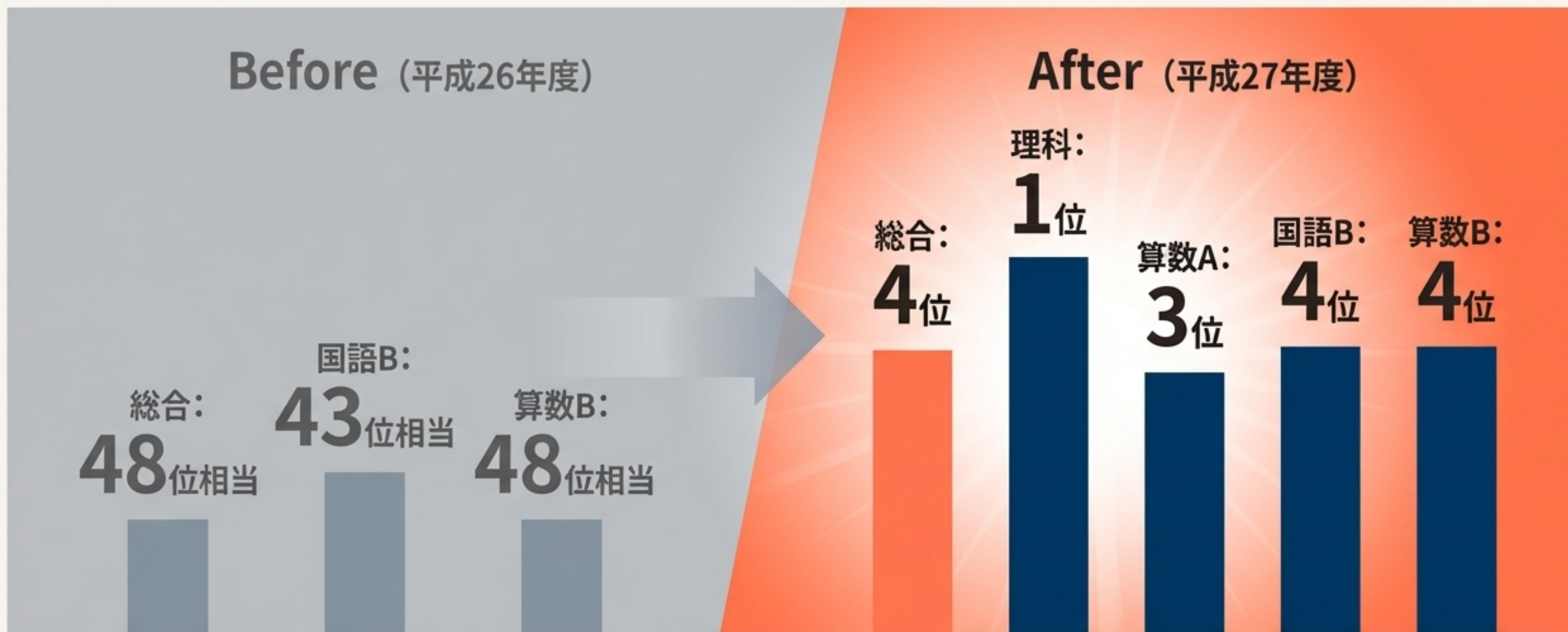
最後にわかった

	課題解決状況		所要時間	
	Q ₁	Q ₂	Q ₃	Q ₃
グループ討論	50%	69%	87分	40分
全体討論	53%	73%	16分	24分

 NotebookLM

わずか1年。全国最下位レベルから全国トップレベルへ。

授業改善を中心とした取り組みは、1年後の全国学力・学習状況調査で驚くべき結果となって現れました。



成果は点数だけではない。学校、そして地域へ。

学力向上は、学校文化全体に好循環を生み出しました。



生徒

「わかることが楽しい」と感じ、主体的に学び始めた。
不登校は実質ゼロになりました。



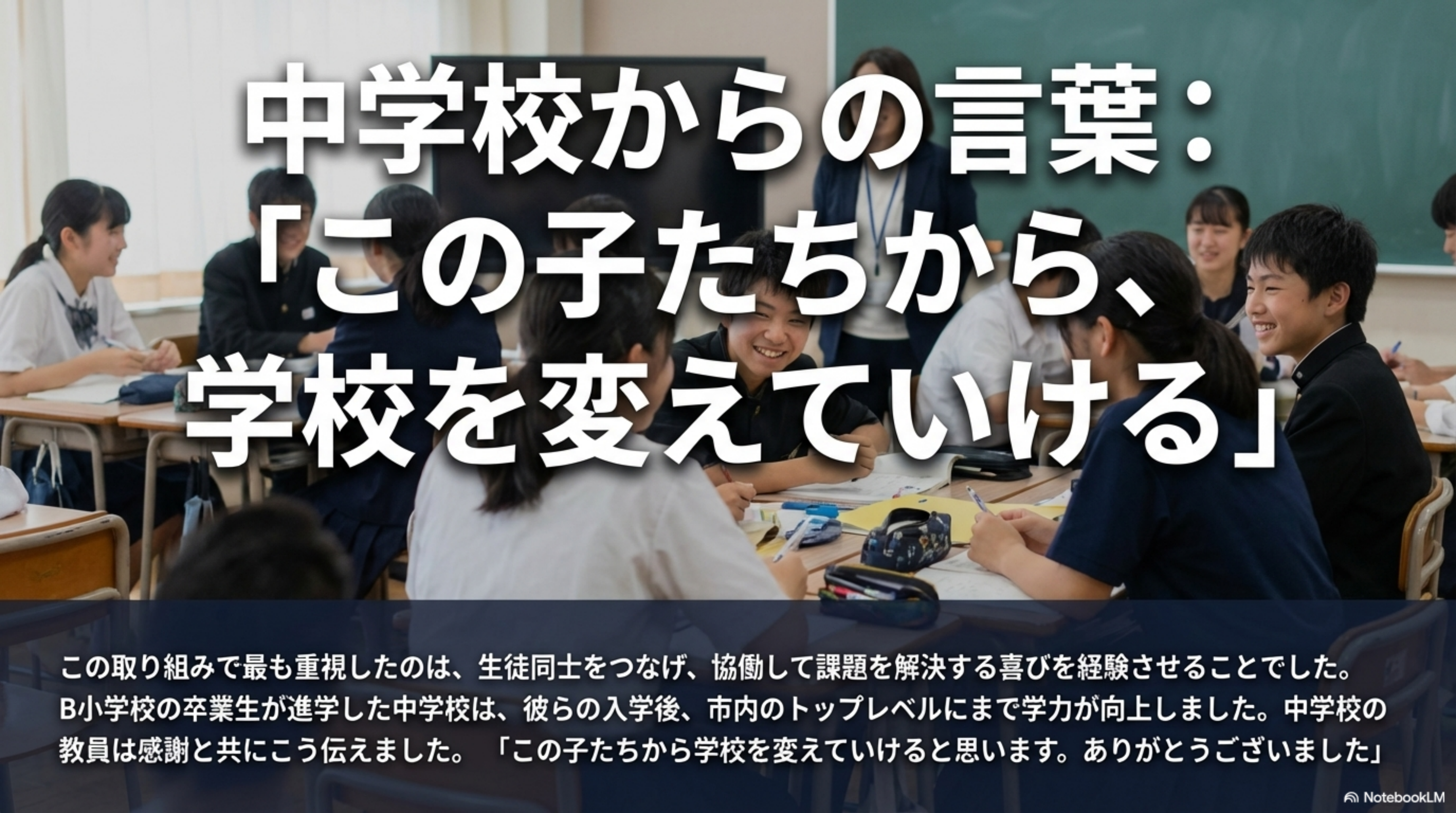
教員

終わらない作業から解放され、「精神的な負担が減った」。職員同士で授業改善について語り合う文化が生まれました。



地域

厳しい状況を諦めと共に見ていた地域住民が、学校の成果を誰よりも喜び、大きな誇りを持つようになりました。



中学校からの言葉： 「この子たちから、 学校を変えていける」

この取り組みで最も重視したのは、生徒同士をつなげ、協働して課題を解決する喜びを経験させることでした。B小学校の卒業生が進学した中学校は、彼らの入学後、市内のトップレベルにまで学力が向上しました。中学校の教員は感謝と共にこう伝えました。「この子たちから学校を変えていけると思います。ありがとうございました」

奇跡ではない。再現可能な「B小モデル」

B小学校の変革は、4つの核となる原理に基づいています。



1. 伴走するリーダーシップ

管理者ではなく、データと対話で教員に寄り添うコーチとしての役割。



2. 実践できる理論

『教頭だより』と動画で、研究と実践の溝を体系的に埋める仕組み。



3. データに基づく対話

客観的なデータを用いて、人格を否定せずに行動改善を促すフィードバック。



4. 協働する文化の醸成

生徒同士、教員同士のつながりを育み、共通の目標に向かう共同体を形成する。

あなたの学校の「架け橋」は何ですか？